成長から取り残された経済特区「スワトウ」

2012.05.05

香港　花木

中国はだいたいどこへ行っても高層ビルが林立する大規模な都市開発を行っているものだが、ここスワトウは異なる。市中心にはかつて趣向を凝らして建てられたであろうビルが立ち並んでいるが、テナントが退去し住人にも見捨てられ、ベランダに植えられた植物がビル全体を乗っ取るかのように繁殖している。市中心部のビルはどれも打ち捨てられたような空き家ばかりである。

↑　スワトウ中心部の「百貨大楼」は 1930 年代建築。当時は大変モダンな建物だったに違いないが、その後の歴史の流れの中で完全に打ち捨てられている。

スワトウは 1980 年に深圳、珠海とともに中国で最初の「経済特区」に指定された都市である。指定当時の GDP 規模ではスワトウが圧倒的に大きかったが、その後、2000 年前後から急速に成長が鈍化し、今ではその一人当たり GDP は広東省平均に満たないのはおろか、全国平均をも下回る水準となってしまった。スワトウ周辺の「潮州商人」は商才があることで有名で、香港の不動産王李嘉誠や国美電器の創始者黄光裕といった伝説の経営者を生みだしているが、彼らはいずれもスワトウを捨て外に出て成功している。

（1）旧市街

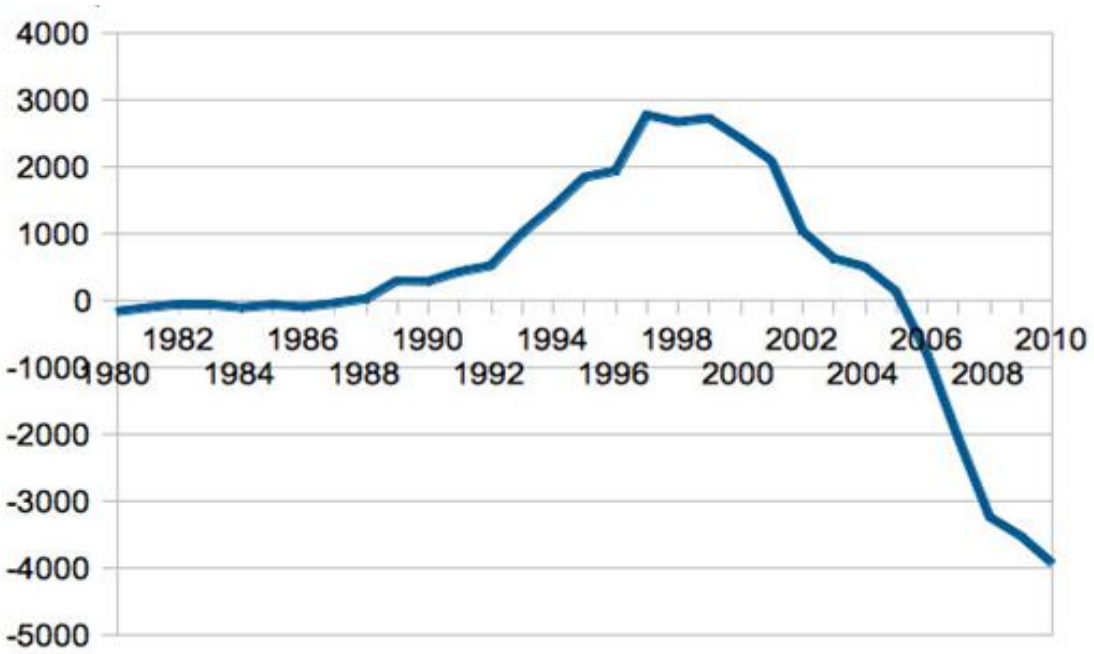
スワトウの旧市街は時代の流れの中で空き店舗と空き住宅ばかりとなり、町を歩くのも高齢者ばかりという状況にある。中国の町でこれほどすたれたところは珍しく、普通であれば大規模再開発が行われてピカピカのビルに建て替わっているはずである。スワトウについても聞いてみたところどうやら最近まで都心再開発の動きがあったようだが、結局計画はストップして事業者も撤退してしまったようである。旧市街だけでなく実はスワトウ市内にはあちこちに建設の途中で放棄されてしまったビルがある。その原因はよくわからないが、事業者の側の事情というよりは、むしろ事業者が当初、資本を投入しようとしたときには思いもしなかったような追加負担が発生し、その過程で事業を放棄してしまったということの方が真相に近いようである。

←崩れそうなビルは窓も破れ誰も住んでいない。ベランダの樹木がビルに根付いて自然と同化しつつある。

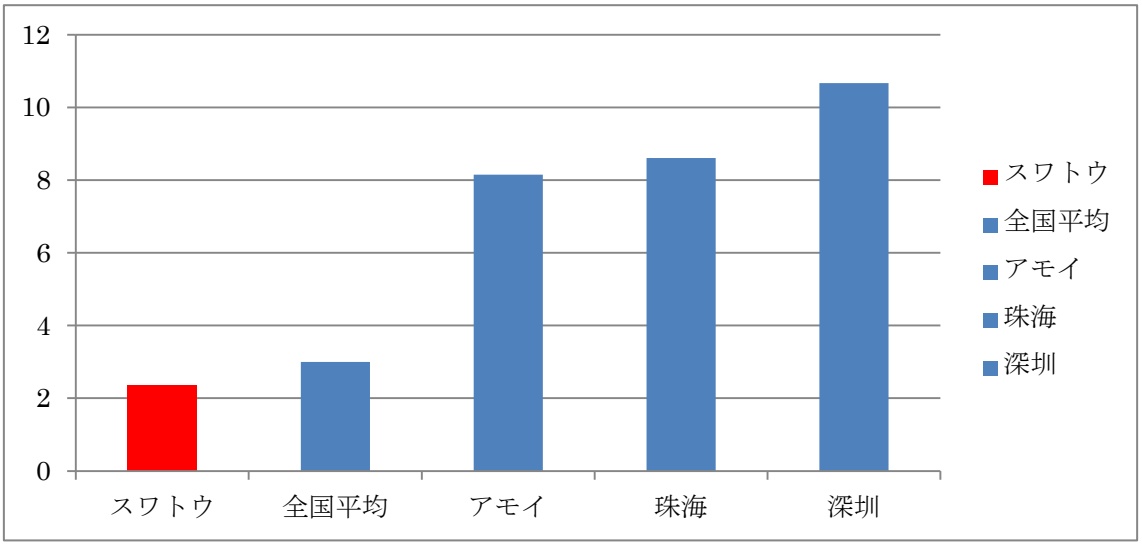
←空き店舗というより住宅そのものが廃墟となっている。

スワトウは改革開放の初期から 2000 年頃までは実はある程度発展していたのである。深圳ほどではないにしても所得の伸びは全国平均を上回り、最盛期（1998 年頃）までは一人当たり所得も全国平均より 3000 元は高い水準にあった。当時の貨幣価値を考えれば全国平均を 5 割は上回っていたことになり、非常に豊かな地域だったのである。それが 2000 年以降は年を追うごとに転落し、2010 年は全国平均よりも 4000 元も下回るところまで転落してしまった。まさにスワトウは独り負け状態にあるのだ。

【スワトウの一人当たり収入の対全国平均との差額（元／年）】



【スワトウの一人当たり GDP と他都市との比較（2010 年・万元）】



なぜこれほどスワトウが急速にうまくいかなくなったかだが、例えば「中国選挙与治理網」に掲載されたスワトウ大学の黎尔平教授によれば、これは明らかに「過度の汚職腐敗」

が原因であろうとしている。実際、2000 年頃までスワトウはアモイと並んで密輸拠点として有名で、原油をはじめ自動車や電気製品等の海外製品を地方政府が「業として」密輸して関税を逃れ、それを全国に売りさばいて easy money を集めていた。スワトウの地場産業は「政府ぐるみの密輸」であり、それによって経済発展を遂げてきたのである。しかし、2000 年以降徐々に監督が強化され密輸が困難になる中で、他の地域（アモイ等）がまじめに産業振興に取り組んだ（例えば LED 産業等）のに対し、スワトウは相変わらず下着や玩具等の軽工業に頼るだけで特段の施策もなく過ごしてしまったのである。更にスワトウでは人間関係、特にスワトウ人による既得利益が手厚く保護され、外から出稼ぎに来た者は交通事故の処理一つとってもスワトウ人を有利に扱う警察の下で不利な扱いを甘んじて受けるしかなく、地方政府トップを中心として既得権ネットワークで結ばれた人間関係が汚職の温床となって経済活動が委縮し空洞化（外部流出）してしまったと分析されている。こうした汚職の頂点に位置していたのは前のスワトウ市書記を務めた黄志光氏である。同氏が 2010 年に共産党により「双規」（民間人の逮捕に相当）された後、共青団エリートの若手幹部がスワトウ市に乗り込んできたものの、町の評判を聞く限りでは実権を握る局長以下の幹部は依然としてスワトウ人ばかりで面従腹背の姿勢を崩さず、構造的汚職は一向になくなっていないようだ。

なお、黎尔平教授の分析によれば、深圳が発展できたのはそこがもともと単なる漁村にすぎず深圳出身者による既得権益的なネットワークがなかったことが大きいという。スワトウには四川のほか江西からの出稼ぎ者が多いが、最近ではスワトウに見切りをつけて福建省温州・泉州あたりに出稼ぎ者が流れ出しているともいう。汚職は論外だが中国なら程度を問わずどこでもある話だろう。スワトウの衰退の原因は、何よりも過度な地元民の既得権優遇と閉鎖的な人的ネットワーク（外来人に対する排斥）にあり、こうした「反グローバリズム」的要素が中国の地域間競争においも大きなマイナスとなっていることを示す意味でスワトウは全中国（及び我々日本にも）大きな「反面教師」の役割を果たしてくれているのではないだろうか。

（2）電子ゴミの終着駅・貴嶼村

スワトウといえば我々日本人には何といっても刺繍のイメージが強い。しかしどうやらこの刺繍も実際にスワトウの市内でやっているわけではなく、周辺の農村地帯で家内工業的にやっていたものがスワトウに集まり、ここを集散地として海外に出ていったにすぎないようだ。（天津甘栗が天津市内でとれていたわけではないのと同じである。）ただし、この地域が家内制手工業が盛んだったことは事実のようで、現在ではそれを大規模化した下着やおもちゃの工場がある。ただし、最近は工賃の値上がりが激しい（スワトウ市内の求人で約 2000 元／月）こともあり、こうした工場の中には閉鎖を余儀なくされたところも多いようだった。

前述のとおりスワトウにはこうした軽工業の他に大した産業がないのだが、それでも市の西の端にある貴嶼村には特色ある産業？が育っているという。ここには世界中のパソコンや携帯等の電子製品が廃棄品（ゴミ）として持ち込まれ、手作業でそれを筐体や電子基板、コード等に解体した上で、銅や金、鉄といった有意金属やICチップを取り出しそれらを中古品として販売する産業が集積しているのである。こうして書くと非常にエコな村のように聞こえるが、実態としては昔日本にもあった「クズ屋さん」の一大集積であり、電子部品を解体する過程で有害な薬品を使ったり、電線を被覆するゴムを焼いて銅線をとりだしたりするため土壌や水質汚染が問題になり、それによる健康への被害も取りざたされている村である。

↑　貴嶼村の表通り。大きなコンテナに廃パソコン等が満載されてやってくる。

貴嶼村の印象は、意外に発展した村というものであった。コンテナに廃パソコン等が満載されてやってくるや否や、それらを何人もの村人が受け取って自分たちの工場に持っていき、そこで電子基板やハードディスクなどに分類した上でそれぞれ電子基板は電子基板屋、ハードディスクはハードディスク屋等が引き取っていく。更に電子基板屋はそれを基盤とチップに分解し、チップだけを受け取った者はそれを分類し磨きあげていく。一方で筐体やコードは破砕機にかけられ、再利用可能なゴムやプラスチックは大きな袋に入れて分類していくといった一連の工程があっという間に進んでいくのである。問題はこれが時

として道路上等で行われていることや、特にチップの基盤からの取り外しの際に炉で加熱したり強い薬品を使うことで、強烈な悪臭がしたり、使用済みの薬品をそのまま川に流してしまったりすることだろう。ただし、このあたりもしばらく前まではやりたい放題の状態だったが、最近では市政府からの指導もあり、正直言って思ったほどのひどい状態ではなく、多少においがきつい他は、日本の中小企業密集地、例えば荒川沿いの川口あたりの雰囲気と比べてそれほど変わらない印象で、正直拍子抜けしてしまったほどだ。

←筐体やコードは破砕しふるいにかけた上で分類して袋詰め（後ろ）する。

←工場の中に山積みされた電子基板（右）。これを基盤とチップを分解して処理する。

貴嶼村にこうした産業が発達した理由については、そこが農作物の育成に適していない地域だった等様々な理由があるようだが、むしろこうした作業は農業より圧倒的に儲かるものであり、どちらかと言えば目端のきいた者がこうした解体をやりはじめ、それがあっ

という間に集積化していく中で、「皆がやっているから」、「とりあえず今儲かればいい」ということで水や大気の汚染に誰も口が出せない雰囲気が広がっていったものと思われる。ある意味スワトウ市政府が前向きな産業振興をしてこなかった中で、地域の住民がとにかく食べていくためにどうしたらよいかを模索する中で育ってきたのがこの産業なのではないだろうか。そういう意味でこのような村がスワトウにできたことは一つの必然なのかもしれない。

↑　貴嶼村の入り口にかかる橋。かつてはパソコン等の解体ゴミだらけだった川岸も、普通の廃材だけになり、相当きれいになったという。

（以上）